

熊谷蓮生一代記

終七

L289
7



慶應二年

宮十一月来之

担任所 岩川村

稻倉 仔六



總管蓮生一代記卷之七

目錄

蓮生武忍ノ一字蓮生法然上人所傳也事

并系傳蓮生法然寺靈湯ノ事

蓮生鳥居ノ事

并上品蓮生發願靈臺ノ事

法然上人所感者ノ事

并上人蓮生曼陀羅ノ事

6099 9

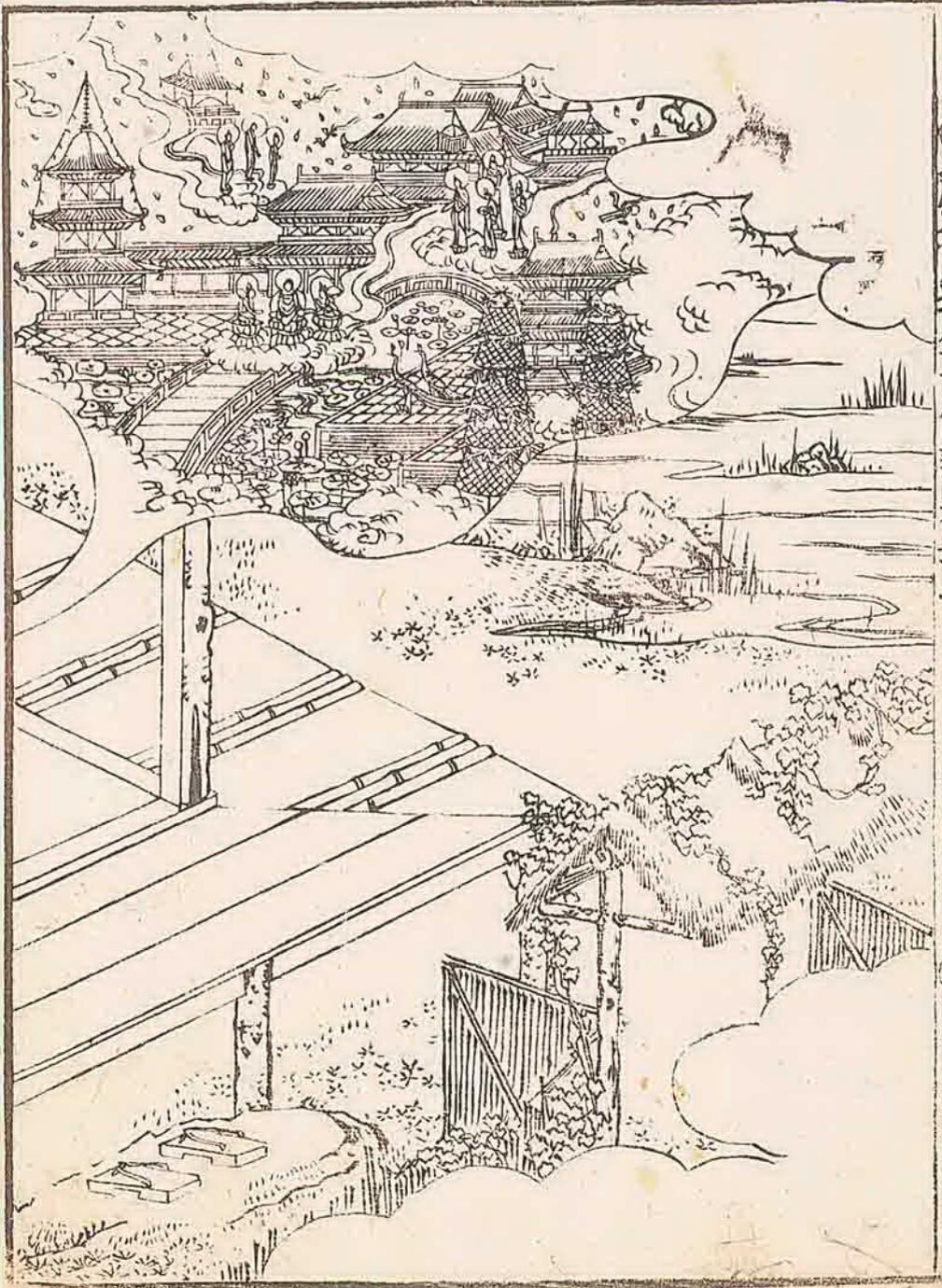
の河津陀蓮生佛とまひたる。それより蓮生武加ふ一寺と建之して
 徳谷と号し。法然上人の真影をなすとて。寺に仕せり。年々徳谷
 なる。ちよにわすれ去。親友中に出せり。都に我有縁の地方とて
 債ひ切べしとのふ。草中と大に難れたる。受て後。即ち彼影を守
 ちり。釈を日小徳とて。礼法小やう。上人は偈一廿り。まより。故の門と其不
 敵起し。或日我他せれ地也。一。佛小悟。東洞後とて。人々一。くふ
 願をも。志願。勿ち人。聖石の。くふ。か。を。白。あ。た。さ。す。は。大。力。剛。勇。の
 蓮生方。し。も。一。足。を。む。と。徳。の。根。ハ。長。中。小。若。あ。ひ。る。有。縁。の。地
 方。人。を。上。人。の。何。ひ。ま。り。た。ら。ば。上。人。の。こ。ま。へ。く。其。所。は。道。場。と。建。て。念
 佛。之。味。を。切。と。し。て。仰。せ。り。と。蓮。生。也。と。は。あ。一。寺。と。建。て。て
 かの真影を安置せしむ。

今徳谷山法然寺に在り。此影、徳谷武加の影とす。此影、相
 好と写して。恒小。相。せ。ん。と。移。す。師。の。言。を。安。住。後。の。所。見。と。て。師。の。自。作。と。述。せ
 也。師。の。深。志。を。表。し。て。自。作。の。本。像。を。附。画。し。あ。ら。ふ。也。此。影。は。是。方。り。又。聖
 蹟。の。こ。た。ま。と。せ。よ。あ。ら。ふ。也。寺。亦。什。室。あ。ま。り。あり。旧。地。津。小。河。東。洞。後。西
 今。元。は。法。然。寺。所。と。て。後。世。系。極。後。小。河。の。南。ふ。う。り。と。

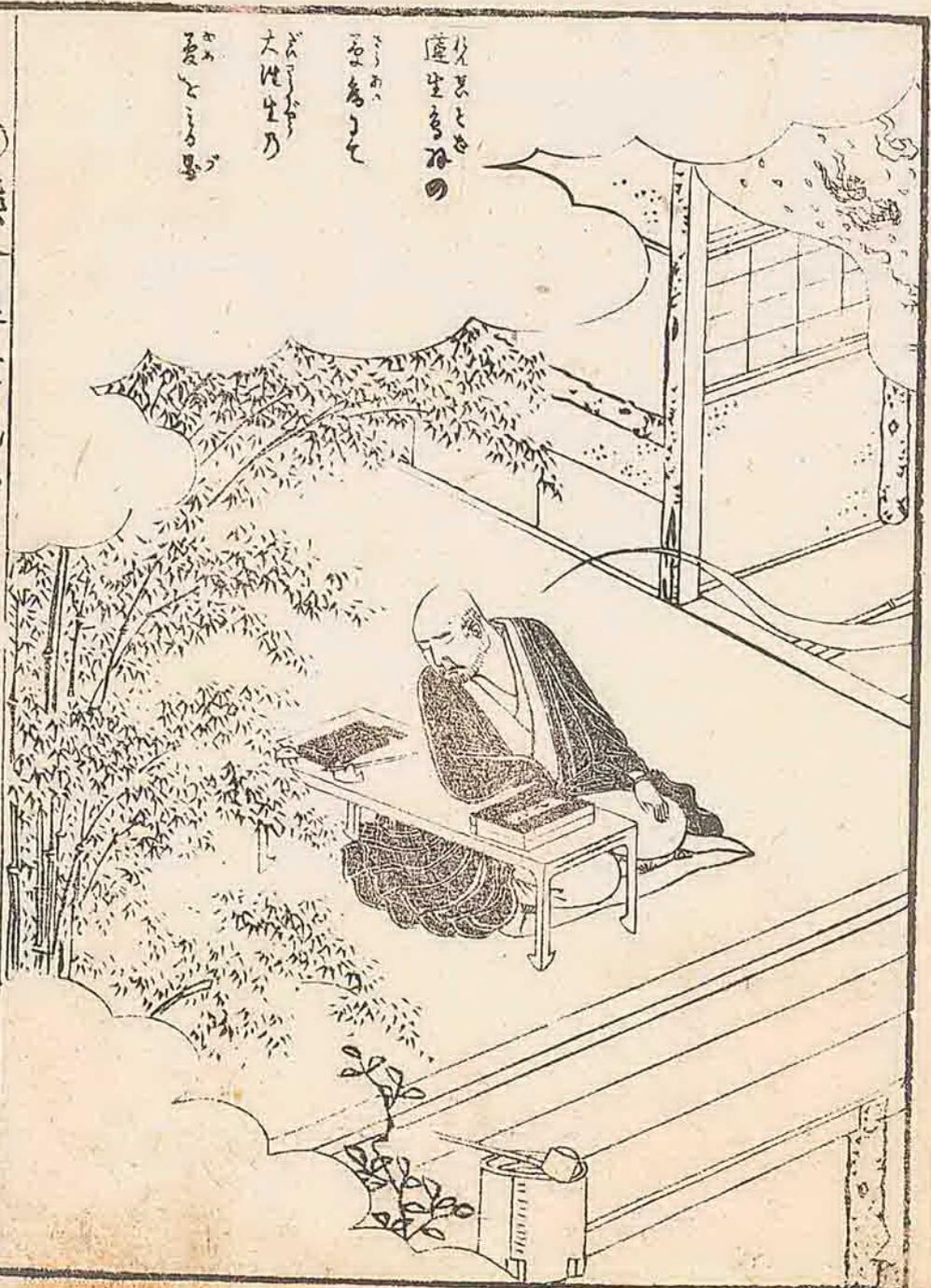
亦蓮生武加則徳谷に在り。法然上人の真影の影を
 書つて。徳谷都の法然上人への影。即ち其影。法然上人曰

依りて。ま。ひ。の。り。は。ぬ。を。後。ハ。思。ふ。来。ち。く。な。り。い。つ。ふ。縁。も
 依。り。ま。ひ。の。り。を。依。て。念。佛。の。文。書。あ。ら。く。寺。徳。と。あ。せ。

第一念佛の行ハ。彼佛乃。奉。教。少。て。は。持。戒。漏。經。漏。咒
 理。親。也。此。乃。ハ。彼。佛。の。本。影。と。あ。ら。ぬ。ゆ。ひ。と。と。之。心。極



蓮生を
大生乃
愛と
石を
大生乃



あもご佛の申すをて蓮生預を殺して申こい。
極歩よせられたらん。身れたのしれあご下下生ちりも。
限りや。あれども天台の御釋お下下八品不可來生と作
られり。用づく一切の有縁の生一入ものことさす。奉迎
せん。縁の生をもちひと懸て吊んがあふ直生上上とせよ
せん。さあ履する。下八品もさす。動転を懸て清よまご曰
慈心信敬す。下下の上生と懸ひら。のしりや。奉代乃派
ま上上と生する者一人も那と懸て。雲房に修すやあをさす
ふ。形と懸て。奉代よ上上と生する者有ま。死よあも
万も高かる蓮生いりて上上と生するべきとさる。下八品
りへれすと懸て。あもご佛奉迎もつべし。これか釈やあ

たすらん。らんぞ次小鉢陀の慈悲うけあらんぞ。次は鉢陀
の預成徳の文破をあらんぞ。次は釋迦の觀無量壽經
乃十惡の一念生五逆の十念生。まご阿鉢陀經の若ハ
一日若ハ七日念佛生。まご一方恒沙の諸佛の徳滅又
善守和尙の下至十聲一聲寫定得生。生れ釈。又何よりも
觀經の上上と生の二心具足の生。まご善守乃釈ふ
具足二心必得往生也。若サ一心即不得生。まご專修
の若ハ千ハ千ちがく。釋。まごく。佛の釈とひ
佛の言とひ善守の釋とひ。若連生と近。まご
破。まご善安結乃罪と得。まご大聖の令
言。まご又光明遍照十方世界の文。入此界

一人云仏名の文は人言もさうじ。孫はホの文をりて疑ふ事
 有りとも一切の有縁の事。即ち歸て迎へて預と教して
 上正上生方すの迎へし事せしと。望み教と教する。よく傳
 幸ありん起五逆の者計はあじ。孫はいつありて迎へし事せし
 こと疑はぬ心ハ。この心を是とあり。上正上生方すの迎へし事
 教あり。其悟を用ふる。吾守又天をけりてん若の上正上生
 方す。又流生れ善とめくるをほ。又無生忍と悟る。又極歩は行教不
 信す。ゆるとのこまり。下八正の生。我持てある教ぞ。うけぬ
 土よ玉終て即歸來る。強がらばなり。まて乞。我教は持て教
 ハ信す。或ハ信せざる者。強がらば信と傍とを圓して是
 事とす。小傳土おけるをしとす。

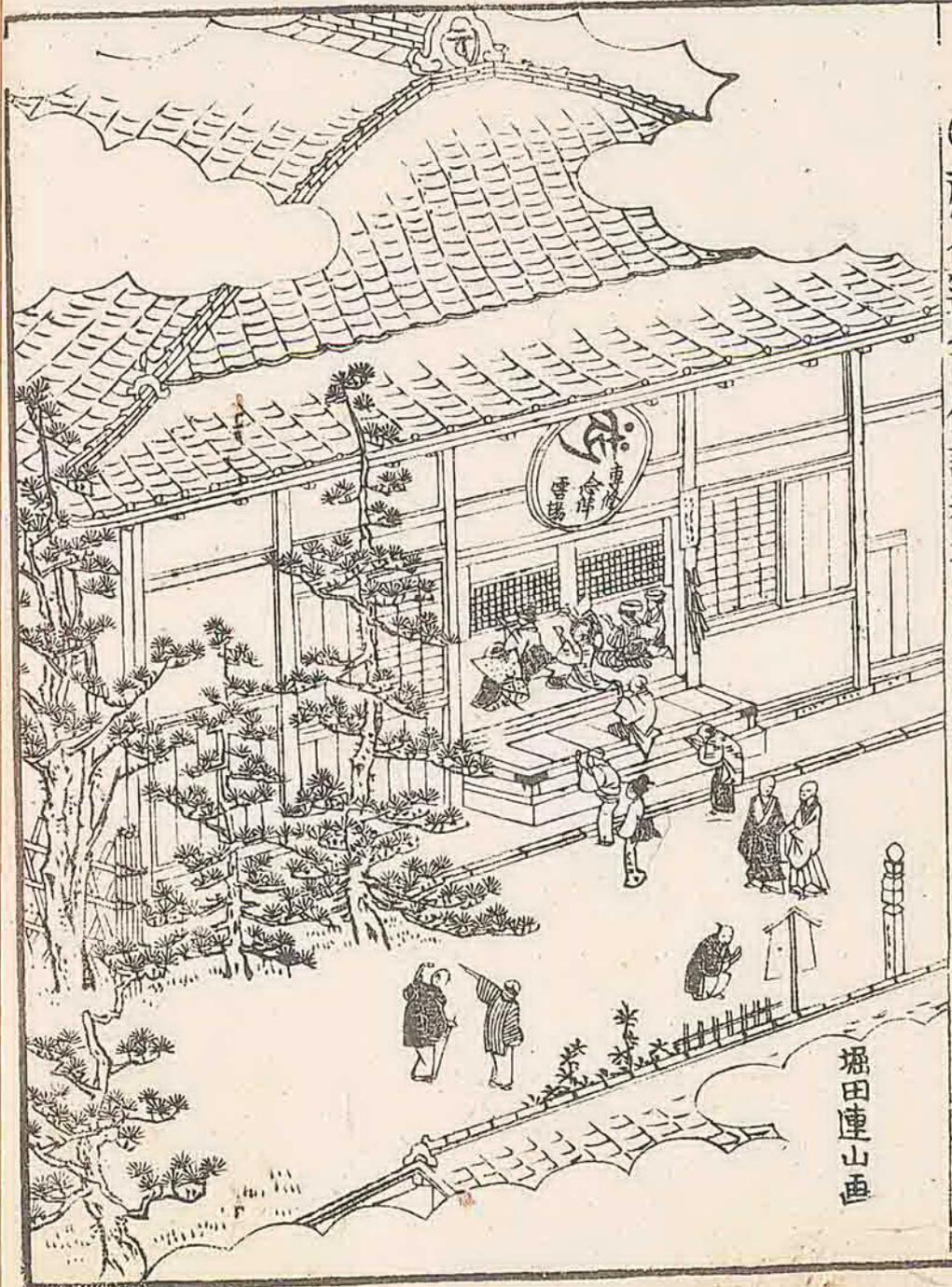
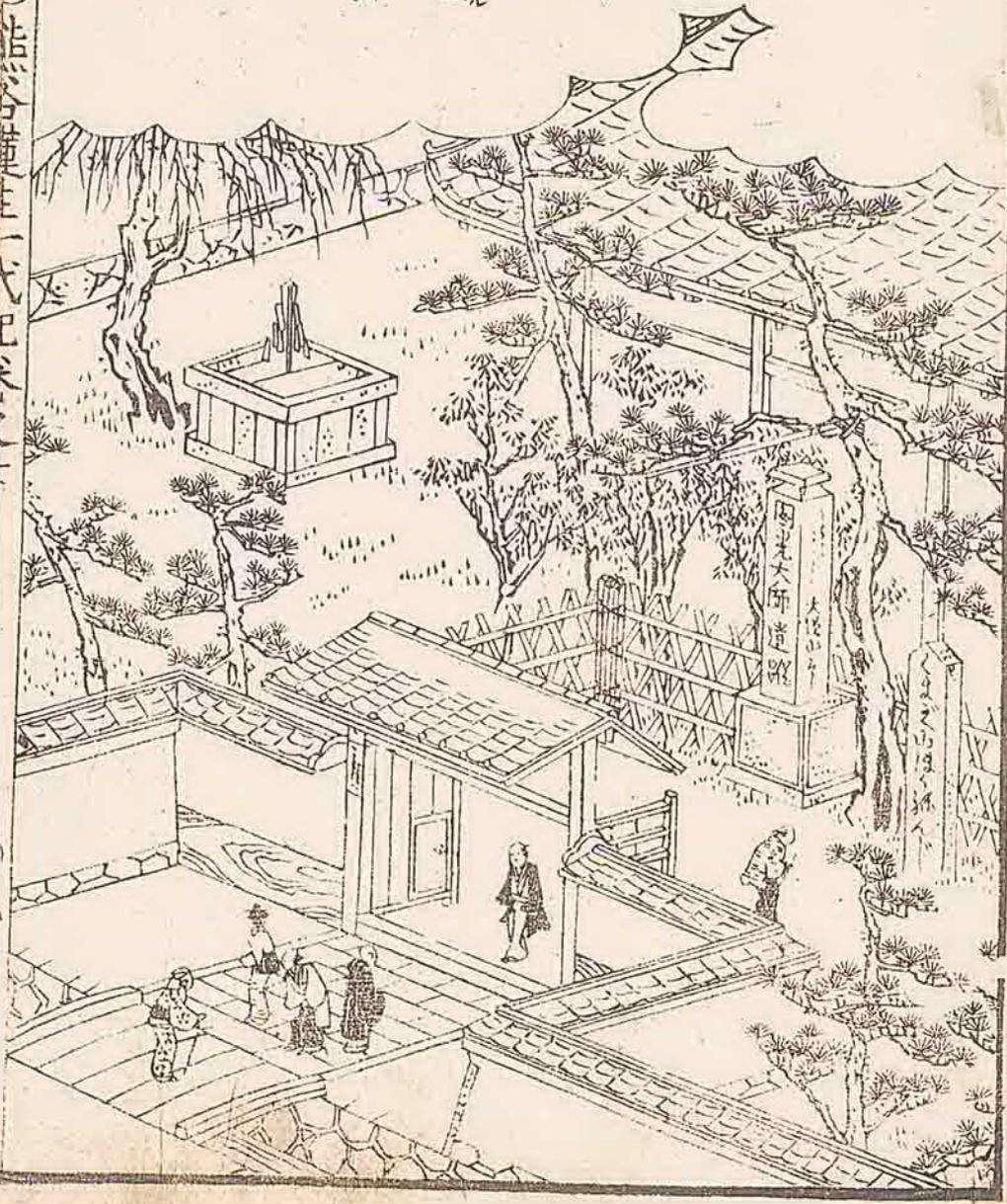
于時元久元年五月十三日午の時。佛偈の文をむすびて蓮生
 いま預をおこも。熊谷の入道六十七果ありて。系もぬくと上正
 上生の迎へ曼陀羅の御前しと。これを書すとす。

法然上人 神感多れ事

并上人蓮生小曼陀羅と送ふ事

蓮生上人蓮生小曼陀羅の事。至て法然上人蓮生房が上正上生の分
 際と神感ありけり。年月の志仏の功力ありて。蓮生
 既上正上生と通じ。於此の東門と名れ。親善執事と
 先して。無教の佛菩薩も送す。と。廿五の菩薩。衆
 衆と個々。光明天々輝き。蓮生房が衆とじて。多の菩薩。衆
 となく。蓮生をうれし。也。晚合衆。と。蓮生。蓮生。

東極
 慈光山
 法光寺
 の景



熊谷蓮生一八訓卷之七

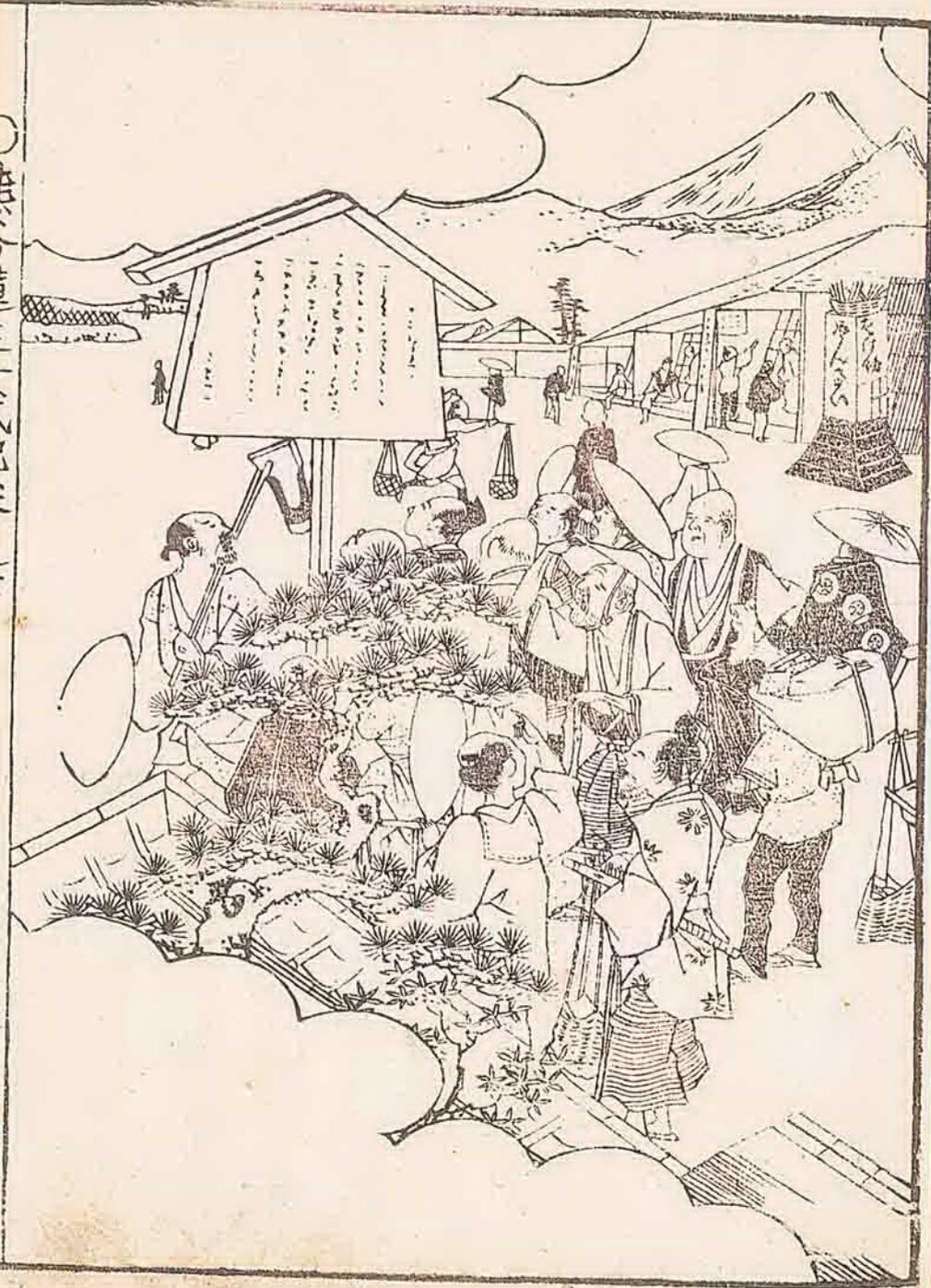
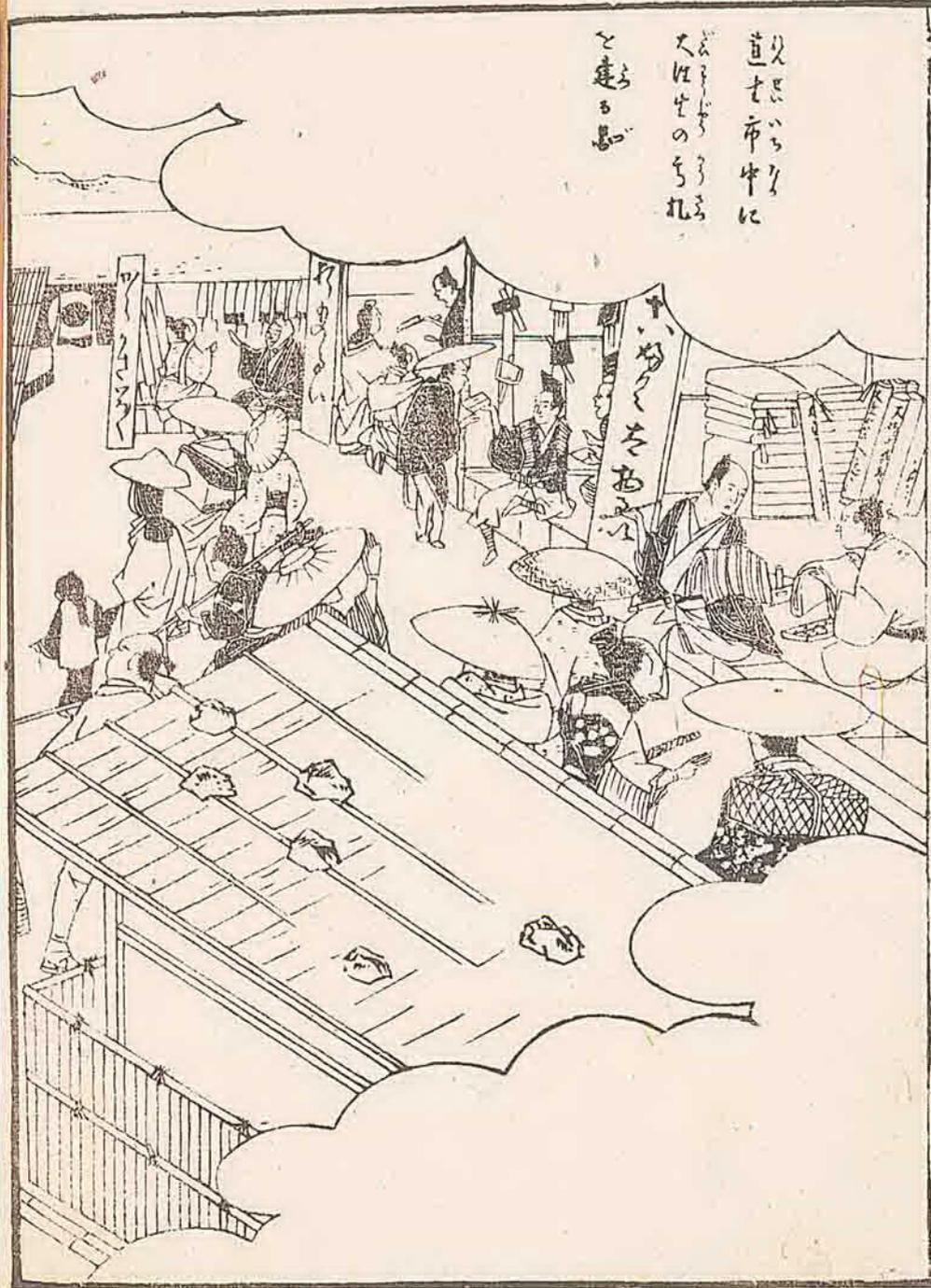
堀田陣山画

子申いづきの言よつとあふやと守り居るふ。上人に人の上
 なるつれあふも。初此なるありしんく業はお返しと我も
 くと心の席よまう。面目と名いぬしき作たり。押信の
 のう解とらふは泥のかけに十八願の中より他力の徳を
 あつてん先信不道とふは才十八願のう解正定聚の權を
 してま実智土の生れとま。意無極のま作と收親とら
 ちり。信いふは願の極するありて。信をこそけ信ひし
 こそ凡ま入報土の正定と定まふ。大經よ曰。信ん親長乃
 一長即得は生位不返不返轉し。又釈り信佛の因
 縁とてして淨よま生せんといふ。佛力位持してま家小
 家の衆よひ。まちり。是別他力に取のりよ叶が加佛克

慶後わん。は然上人先夫の言をよみくは後だ。其條とて使
 小也。よして。必云。奇端のり。有とけい。後必苦とて。用る
 べし。と上人より。諸方此に。其の一人へ。作。送。せ。ま。ひ。く。と。ち。り。有
 有り。と。云。よ。押。は。て。着。末。の。奇。端。と。い。ふ。也。法。を。ま。よ。多。の。と。し。て。ま。り
 辨。又。淨。土。一。意。の。と。し。て。若。守。大。師。亦。守。大。師。親。長。を。人。と。も
 皆。着。ま。り。て。ま。り。と。建。立。を。し。る。も。と。ま。り。又。佛。の。ま。り。ち。り。り
 け。然。若。入。及。の。け。生。れ。あ。義。經。法。也。寫。海。う。ま。り。又。教。ひ。ま。り。
 夫。れ。あ。祖。師。上。人。も。然。よ。あ。り。記。は。遠。ま。り。は。た。ま。り。ま。り。り
 け。然。と。人。の。所。殊。ち。く。ん。を。勿。然。若。入。及。磨。滅。の。權。も。ま。り
 せ。き。ま。り。り。ま。り。上。人。の。殊。れ。神。と。と。感。ず。る。ふ。あ。ま。り。り。り

徳谷直義父入道と古師の遺事

以思はらけ
直七市々に
大はせのちれ
と建る品



佛ハたと大ニ世界火煙にほらもあふ其火中を通りて
ても佛名とそけいこそとあしめさる。ゆへ佛名を人の動むこと
又もひて大善根なり。ゆへて上品上生れ極楽とそを來極園
して人を助んとす事也。當來ハ極楽なり。そくハ幸ふ者縁の
者を引寄して一蓮託生の事とて通んて頼ふこと。ゆへに
きふなり。互ひお傳令あらず。あんなごとと通せんこと。面談ふ
等。今ハあつともまごぬ浮世の夢なり。今生れめんたん
今も限まり。極樂の再まをなふあつとも。蓮生のこころを
殘情と果さんと作らる事也。蓮生一言の子細もなす。即
ごふんいともやるといふことしてりりる。

蓮生村居の市小高れをさる事

并ニ憐直家乃一孫(建書)の事

おも入道啼玉の後ハ又々法人を化守し其傳ハ海終二人急
の白紙をさふせり。ゆへに建永元年ハ八月ハ一孫を築め。秋
明年ハ二月ハ八月ハ大生生とてさるなり。ゆへに建永元年
人ハ来りて生させね子とらんて。ゆへに建永元年ハ八月ハ
村居ハ市小札をさる事也。ゆへに建永元年ハ八月ハ市小
の生をむけし。我子小治郎建永元年ハ八月ハ市小
報款縁者も死後の事も頼おき。ゆへに建永元年ハ八月ハ
跡と其文よ曰

至子そ縁後、可令存知旨

一 先祖相傳所領安堵之御判七并保元年中以來至建之

年中軍忠御状二十一通有之

一 對三皇不可成道後并武道可守之事

一 上人御筆所書并迎接曼陀羅可成信心事

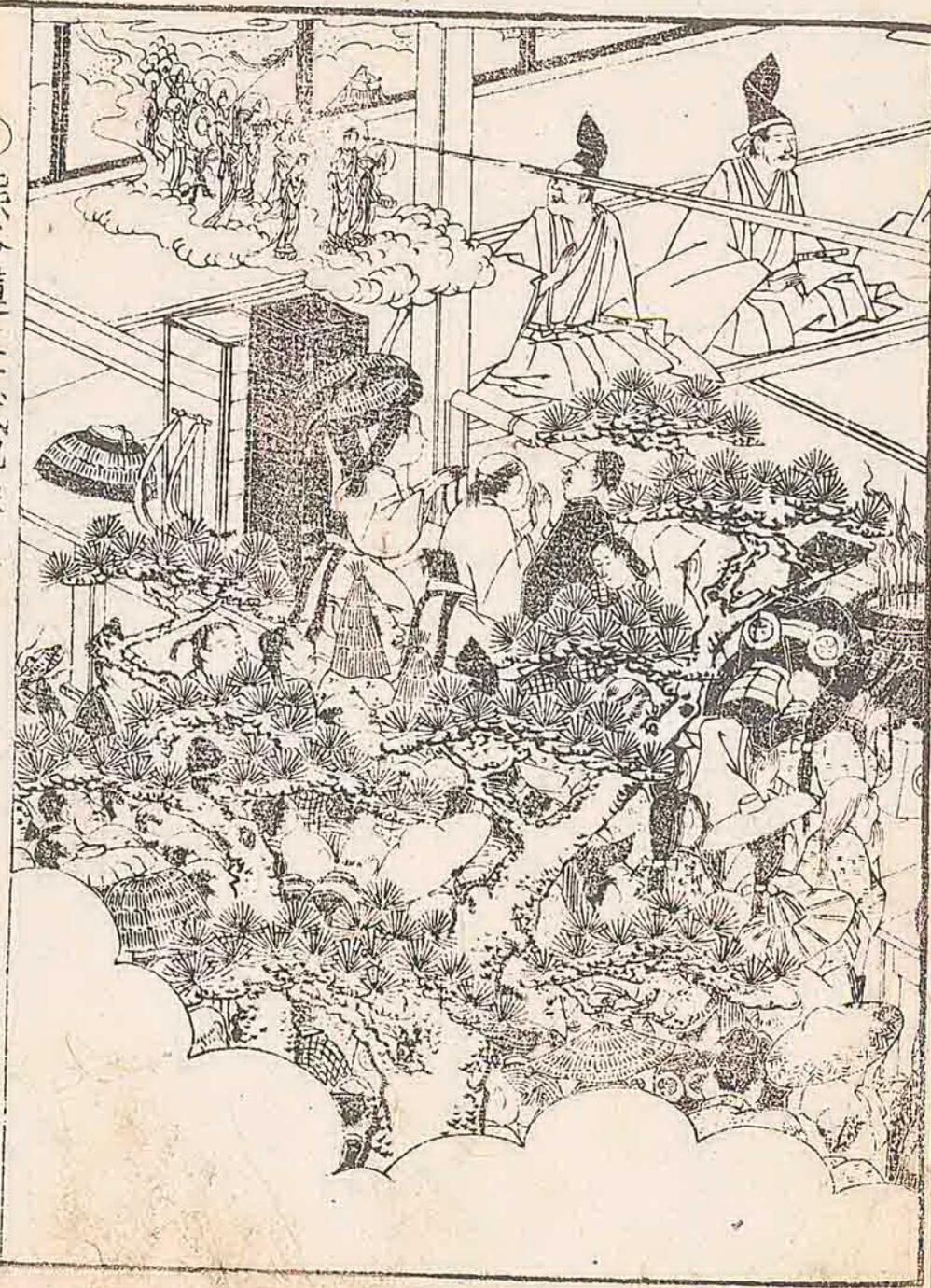
右三箇條の外依其身器可覚悟者也仍置状如件

蓮生在判

美元元年正月

初も二月八日ふちりけとぞ。高札の趣きとて國の繁道依男女蓮
せ妨れ性生とて念佛の功德をたれとべし。我もくと慈香
が寓所は解集する若歳五方とふ其教を志し蓮生坊ハ表明
に沐浴して身を清め。礼盤ふのやりて。念佛數百遍と唱。信人
同善ふと念仏をこち人性生今や同とす。一とてり人信たるふり

蓮生あつくりありて念佛とぞめ。眼を冴きて信人むつひ
々ハ今日れ性生延引とべし。佛の所告ちり來九月四日
ふかすほど幸を遂べし。若其日來陰あざとらひて。礼盤
より下るあぞ。群集れもう無とる。念仏の功德もあふ
あれり。ちんぞや同ト人回て死する日と知。びきより方。は
てや今年のことと去年よりも。れとて滅とけりありし。ハ
我が性りたりと。蓮生と朝等のしりごと。若て候りし。ハ
慈香が一族良等とて。守て如かき。蓮生あひり。ハ
と結む。ハ何れ性生をほり。けのちかき。ハ對して面目を
政方りと歎き悲しむ。是だ。入道後。ハ我既ハ入滅とせ。あふ
孫陀如來告む。ハ。來九月四日。まを性生と待。ハ。と。ハ



蓮生法師
上人の遺生
の事

のこゝろにふあゝず。まゝにせしむる備人いふやど小ぢあふらもあゝも
答へくまきや何ぞ借人けあゝらにわゝず。来九月にりふい
と。生と通ぢた。その朝ハ浦べきあゝら。わゝらずらんよわら
事あゝれと。せしむる世に。それよりまゝと所くと近所り。まゝ
とす。あゝら。まゝの事とて。法人信仰せむ。死損の内坊と
と指して。後ハ一と。蓮生坊ハ耳あゝら。けを。居らゝら

蓮生再喜れとまゝ大生生の事

并上品生奇巧の事

抑日本市の始りハ大和國辰の市を。初とて。そのら。後
にと。まゝ。此村忌市と。ハ武。延。玉。崎。玉。郡。あゝら。徳。谷。乃
郷。ハ。崎。玉。大。里。け。あ。郡。あ。崎。玉。乃。徳。谷。玉。崎。玉。郡。あゝら。徳。谷。乃

申れゝにわゝらて。り。後。事。里。を。り。じ。う。ハ。張。り。ま。市。を

ア。年。う。り。て。今。ハ。形。を。り。小。邑。あり。それ。わ。か。る。後。乃。の

高。北。あ。り。也。中。度。の。あ。く。法。人。あ。り。ま。り。も。理。り。と。ま。ん。後

う。り。や。す。く。ま。ま。も。す。だ。て。九。月。に。り。ま。を。付。く。は。だ。ま。こ。く

ま。れ。と。ま。て。初。を。旦。一。い。う。く。九。月。に。り。ま。は。生。を。送。る。な。り。

い。づ。れ。も。ま。り。と。ま。の。疑。ひ。と。ま。ま。と。ま。ま。と。一。張。紙。に。ま。ま

ま。ぐ。止。め。万。一。ま。ま。相。違。ひ。を。も。初。身。上。海。と。ま。ま。と。ま

月。結。ち。ま。ま。の。事。ハ。か。ま。ま。の。内。用。を。り。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま

ま。ま。と。ま。ま。の。佛。の。法。告。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま

ま。ま。の。生。と。結。ぶ。ん。だ。既。に。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま。と。ま。ま

あゝら。着。い。つ。つ。り。者。を。り。し。い。く。れ。を。だ。大。切。の。志。願。を。ま。ま。を

つくべし。さすれば今我大生を遂と法人の心をせむ。尊
 修念佛門に入る事多うお下。是別りかぶる事なり。其用
 意とてうなる事。親族の輩よりきりとおりの。今この止むこと
 あらざる。その後してありたる。蓮生五月の事はいさうかむ
 事ありける。九月朔日皇よ音楽をて後いさかお養育と
 たり。身安樂なり。叔をふたり一づ。先達て集る共けり
 色とて欺くたりん。きりかきりまづりてんよ。大勢の朝
 一の群衆もなる。春もも信じて盛なるも市れおし。
 蓮生坊主人の。未明ふ体法して修修の用をことなり。上人
 孫陀多迎の三尊化佛菩薩の形像と一補ふ事終せしむ。
 秘蔵しむひたる。蓮生坊主人に京京より武州へありける

とた。上人よりありたる。此の上人は、いままんががゆありたる。その
 と。元久二年蓮生坊武州へを命の。上人より蓮生坊にたまふ。けしきありたる。
 の。能く秘蔵し樹の相とあして。上人より蓮生坊にたまふ。けしきありたる。
 樹とあはれの。樹ありたる。いまま武州蓮生坊にたまふ。けしきありたる。
 と。まゝその。樹ありたる。いまま武州蓮生坊にたまふ。けしきありたる。
 とくけなり。これ盤小の。端在合衆して。きりかきりまづりてんよ。
 をてた人々も。忽ちして音楽を。世をたまひびきりたる。
 音四方ふ。これ。清土の。其の。けしきありたる。
 の。道俗も。皆仰れぬ。清土の。其の。けしきありたる。
 生法師も。佛も。皆仰れぬ。清土の。其の。けしきありたる。
 秘して。大生を。て。其の。けしきありたる。
 の。こも。皆。清土の。其の。けしきありたる。
 まり。非。皆。清土の。其の。けしきありたる。

九想詩繪抄

ひろかき 全部四冊

唐土の東坡居士の
九想詩と多く必字
しく短く老翁男女
に安んずるし書る

右の書は板か来仕はおりろをかきやなれとてあつて

大坂心齋橋通南又太郎町

大野木市五郎

京都衣棚通二條下ル町

細野四郎治

發行

江戸日本橋南堂丁目

須原屋茂兵衛

同 浅草茅町二丁目

同 伊八

同 日本橋通二丁目

山城屋佐兵衛

同 芝神明前

岡田屋嘉七

同 兩國横山町三丁目

和泉屋金右衛門

同 芝神明前

内野屋彌平治

同 日本橋通二丁目

須原屋新兵衛

同 室町二丁目

大坂屋藤助

京都三條通御幸町角

吉野屋仁兵衛

尾州名古屋本町通

永樂屋東四郎

大阪心齋橋通安七町

河内屋和助板

書肆

